「忠臣蔵三百年」48番目の義士

萱野三平重實⑪

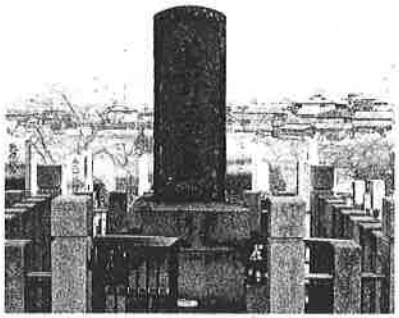
「結び」にかえて（1）

「忠臣蔵」として紹介される赤穂事件そのものが、まだ多くの謎に包まれているように、萱野三平についても多くの謎があり、このシリーズの結びにかえて、いくつかの謎について推測してみます。小説の世界では、推測や想像をもとに文章を書くのは許されることですが、歴史家がそれをすると許されないのは言うまでもありません。以下に述べることは、あくまでも根拠のない仮説ですので、みなさんがどの程度受け入れるかの判断に委ねたいと思います。

三平は武士でしたが、みなさんは三平の武芸についてどのようにお考えでしょうか。同じ赤穂浪士の一人である堀部安兵衛のような「剣豪」とか、剣の使い手であった「武人」といった印象をお持ちですか。それとも、「仮名手本忠臣蔵」が三平をモデルとして創出した（現実とはかけ離れていますが）早野勘平のような「やさ男」「色男」のイメージをお持ちですか。

おそらくは、後者を選択される人が圧倒的に多いと思われます。どちらも具体的に証明するものがなく答えは謎ですが、私は、三平を「文人であり武人」であった可能性が高いと考えていますので、その理由をいくつか述べます。

三平の兄重通の子孫である萱野重義氏が所有されている三平の遺品の一つに、「和泉守」の銘のある太刀がありますが、その太刀の刃渡り（刃がついて切れる部分長さ）が約2尺8寸（84㎝）あります。平均的な太刀の刃渡りは2尺3寸（69㎝）程度ですので、かなり長いことがわかります。



例えば、身長が170㎝ある人でも、鞘からスラリと抜くことが難しい長さですので、背の低い（腕の短い）人には扱えない太刀です。また、長さだけでなく、重量もかなりのものになりますので、この太刀を扱えるのは、背が高く、かつ力が強い人に限定されます。

次に、早駕籠の使者として数多くいる藩士の中から、なぜ三平が第一便の使者に選ばれたのでしょうか。生半可な体力で、江戸から赤穂まで約4日半にわたり駕籠に乗り続けることは不可能ですので、三平が選ばれた理由の一つとして、日ごろから体を鍛えていたことが推測されます。

現に、三平とともに使者となった速水藤左衛門は弓の名手として知られていますし、第二便の使者であった大石瀬左衛門は剣の名手、原惣右衛門も槍の名手であったことを考えあわせると、当然のことながら、三平も何らかの武道に通じていたと考えることは可能ではないでしょうか。

さらに、三平だけでなく萱野家と武道との深い結びつきを推測させる出来事が、三平が亡くなる約1世紀前の有名な関ヶ原の合戦が行われた慶長5（1600）年に起きているほか、後に萱野家からは歴史に名を残す兵学者が誕生しています。詳細は、次号でお伝えします。